

29-0839

医薬品使用実態調査 (DUS) における集計単位の検討

○竹村 麻耶¹, 上谷 幸男¹, 三村 泰彦¹, 川上 純一¹, 足立 伊佐雄¹, 津谷 喜一郎²
(¹ 富山医薬大病院薬, ² 東大院薬)

【目的】我が国では数多くの Drug Utilization Study (DUS) が報告されているが、その多くは研究方法において内的・外的妥当性を維持していない可能性がある。集計単位として成分量や金額がしばしば用いられており、薬剤間や施設・地域・国家間における比較には適していないと考えられる。本研究では、抗菌剤をモデルとして WHO の ATC/DDD を含めた種々の集計単位を用いて DUS を行い、集計単位による結果の相違や国際比較単位の使用に関して考察した。

【方法】富山医科薬科大学附属病院 (当院) における 2003 年度の全入院患者を対象として、抗生物質製剤と合成抗菌剤の注射剤と内服剤の使用量を調査した。データソースとしてレセプトデータを用いた。使用量は、金額、力価、製剤数、当院で一般的に処方されている用量 (TMPU-PDD) および WHO-DDD で集計した。WHO-DDD の設定がない薬剤については海外における販売状況を調査した。

【結果・考察】各集計単位によって薬剤間での使用量の比率が異なった。常用量での集計に関して、TMPU-PDD を用いた場合、当院における実際の使用状況を概数として把握できるが、他の施設や地域との比較には適さない可能性が考えられた。一方、WHO-DDD は当院における 24% の抗菌剤には設定されておらず、その多くは日本だけまたは日本と近隣諸国だけで市販されている薬剤であった。国際比較で繁用される WHO-DDD は欧米地域で販売されていない薬剤には設定されていないことも多く、集計作業に単純には使用できないことが分かった。